



東京に長く住んでいても知らない世界は限りなく多い。赤坂や青山、渋谷でも仕事をしてきたのに、昨日六本木に行ってみたらまったく別の世界で、宇宙人がふわふわ浮いて、甲高いノイズの間にフニャフニャと音を発しながら群れたり離れたりしながら移動していた。こんなところで生身のニンゲンが生きていたら、良いか悪いかわからないが変質してしまうんでないかな。帰りに電車で南千住、北千住と夕暮れの窓の外を見ていたら、流れていく暗く密集した家並がいかに貧乏人の世界だとしみじみと納得できて、ずっと下町で生きてきた者として心

暖かくほっとする。みんながみんな、同じ方向と高みを目指す必要はないんだよね。

そうそう、昨日はたまたま乃木将軍のお宅に行き当たり、その簡素な邸宅を見てきたが、そこは日本という社会が大きく舵を切ったところの現場で、その簡素ささえも、今の宇宙的なきらめきと不可思議なエネルギーの混濁と混沌さへとつながる方向を持った力なのだったなと戸惑いとともに思った。ついこの間まで、毎日早朝から、陸軍の射撃訓練の音を聞き、移動する部隊の姿の中にいた身としたら、乃木将軍の時代は遠い昔とはとても思えないし、いまの日本がいつ、どう舵をきるかだってどうなるか知れたもんじゃないと思っている。そんな危うさを改めて感じる。

その、この間はチッタゴンという町へ行ってきた。町の名前は昔の日本の戦艦にも出てくるので、日本と全然関係ないからね、と気楽に考えられない世界なのだが、こっちはまあ、相変わらず気楽に「うるせーな。」と思いながらコーランの声におこされ、コップの底に残っていた昨夜の名残の御蔭帯のウイスキーをやって、初めての街だし、歩いてこようとふらふらと宮殿のような馬前に歩いていった。大体昨夜は遅かったから調子が出ない。350万もの大都会なのに、信号がないものだから、四つ角ごとにリキシャや、オート三輪車、バスが4方向から殺到して押し合い、誰も引かずに大騒ぎの大騒ぎ、どうせ動かないのだから、隙間をヒトが歩き回り、物売りも大忙しと言う煮えくり返る鍋の中のような中では、宿に早く帰れるはずはないという夜だった。

7時前の駅はもう人々が動き始め、でっぴり太ったバスの呼び込みは「ダッカまで200タカ!。」と叫び、「コミラへ行くんだが。」と聞いたら「100タカだな。」と元気な声でも、軟弱な日本人と言うのはこういう道を歩くのはつらいんだね。何しろ、歩道のあちこちのごみの詰まった麻袋で沢山の子どもや、女たちが寝ているんだから。その頭の脇をサンダルや靴が足早に通る。駅に入りホームを渡る橋の上に出ると、両足が10センチしかなく、片腕は針金のようになった子が、這って、しっかり目を見ながら私にじりじりと地面をにじりよってくる。そこを過ぎて駅の向こうの住宅地に入ると、下町の長屋にいるような世界。帰ってくると、元気なおばちゃんが「何かくれ、金くれ。」と待っている。いつものことだが、慣れるものではないな。そんな世界と、私の世界は数時間でつながっている。乃木将軍の世界と、六本木ヒルズの世界もまた私の中で隣り合った現実だが、私はどうやら時間と空間の狭間に落ち込んだ世界を生きているようだ。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX 03 5600 0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com